



各務原市内寺院簿

(その二)

☆ 前回の那加地区寺院簿の発行に続いて、今回は各務原市の南部地区と、鶴沼地区寺院の完成したものをまとめ、第二部としてここに編集した。

市内南部地区寺院の寺歴調査については、まだ調査は続行中であるが、先の第一部資料にも述べたように寺院側の都合もあり、予定はしていても、ご住職のほうに葬儀など急な行事が発生して予定の中断をすることもしばしばあった。

それによって調査には長い時間がかかっていた。この南部地区に最初に訪れたのは、平成元年八月二十六日。我々歴史サークルが訪問した寺院が、「西入坊」であった。

当時、市史に堪能な小林義徳先生指導のもとにお邪魔してから、すでに十年近い年月が過ぎ去っている。その小林義徳氏は、西入坊から五日後の八月三十一日の夜、少年がハンドルの握る無免許の二輪暴走車によって他界された。しかし、当初の目的である寺史編さんという目標を挫折させるわけにはいかない。

現在は幸い各務原市で古文と歴史の第一人者である「足立秀成」先生の指導の下に、寺史の協力もあってまとまったものを小冊にしたが、本来は市内全寺院を一冊にすべきものであった。

この資料収集にあたって、桃春院ご住職からは、何度も資料についてご協力して頂いたことを感謝したい。同じように、前渡不動の関係者からも丁寧な協力があつたことを感謝します。

安寺「空安寺」については、梅田さんの協力があつて、鶴沼地区寺院は完了しました。

残るは蘇原地区・各務地区もこれまでのように努力を続けたいと思っています。

足立秀成 九年秋  
指導

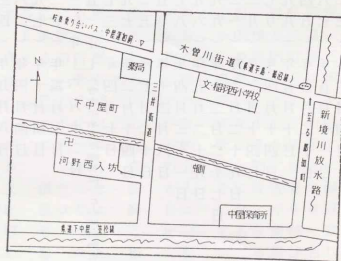
各務原歴史サークル  
資料編集 小野木 昌葉

住宗開闢本  
派山基尊  
派山基尊  
諸佛

小島秀法  
宗大學派  
師  
小島秀法  
創谷派  
師  
阿草創谷  
陀土長德  
聖人來信  
二入道  
聖德(製  
太子(製  
作年他  
不詳)



河野西入坊



現場見取図

河野西入坊

■各務原市下中屋町二丁目一七ノ一  
T E L 〇五八三(八二)二三三六

目次

一 市内南部地区・鵜沼地区寺院 「取材順」

一	西入坊	浄土真宗 大谷派	(下中屋町)	一七
二	慈勝寺	臨濟宗 (無住のため臨時住職)	(山脇町)	二一
三	松本寺	浄土真宗 本願寺派	(小松町)	二二
四	常真寺	浄土真宗 大谷派	(小野西町)	二二
五	安貞寺	浄土真宗 大谷派	(大野町)	二二
六	明通寺	臨濟宗 (無住のため臨時住職)	(下切町)	二二
七	自林寺	臨濟宗	(前渡町)	二二
八	寶林寺	臨濟宗 (無住のため臨時住職)	(前渡町)	二二
九	金龍寺	臨濟宗	(前渡町)	二二
十	佛眼院	臨濟宗	(前渡町)	二二
十一	桃春院	臨濟宗	(前渡町)	二二
十二	前渡不動	臨濟宗	(前渡町)	二二
十三	大正安寺	臨濟宗	(大正安寺町)	二六
十四	長安寺	臨濟宗	(三ツ池町)	二六
十五	観音寺	臨濟宗	(大伊木町)	二六
十六	眞照寺	臨濟宗	(宝積町)	二六
十七	空安寺	臨濟宗	(羽場町)	二六
十八				

以下寺院は調査続行中

鵜沼地区

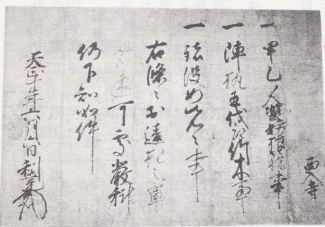
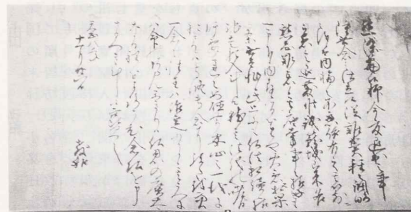
市内南部地区の以下の寺院は目下調査続行中







\* 蓮如上人影(延徳二一四九〇年)運如上人より下授。  
\* 十名号(運如)天正八(一五〇八年)十一月二十八日(日付)  
\* 願寺教如書状(天正八)一五〇八年十一月二十八日(日付)  
\* 宗祖御真筆西入坊(天正十年)安政四(一八五七年)の日付。  
\* 神懷集写本(正徳元年)に存覚上人の著書を行念法師写)



(寺宝) の本願寺・光寿(教如)の書状(一八五八年)十一月二十八日(日付あり)

斎藤利光の禁城主  
織田信孝の老  
西入坊はと  
天正八年はと

### 河野門徒

□ 尾張九門徒

- \* 円名城(西徳寺)
- \* 専福寺(真宗大谷派竹鼻別院)
- \* 加納寺(専福寺)
- \* 称名寺
- \* 西光寺
- \* 安楽寺
- \* 善泉寺
- \* 妙性寺

- 〔別院〕羽島郡新井町四寺七
- 〔別院〕羽島郡笠松町三寺九一七
- 〔別院〕羽島郡岡田町三寺一〇二七
- 〔別院〕羽島郡松崎町二寺一〇七七
- 〔別院〕羽島郡小坂町三寺九七
- 〔別院〕西尾郡原下町一寺
- 〔別院〕西尾郡御下町一寺
- 〔別院〕西尾郡北野町一寺
- 〔別院〕西尾郡北町一寺
- 〔別院〕西尾郡方町一寺
- 〔別院〕西尾郡宮北町一寺
- 〔別院〕西尾郡宮市町一寺
- 〔別院〕西尾郡宮市町一寺
- 〔別院〕西尾郡宮市町一寺
- 〔別院〕西尾郡宮市町一寺

□ 美濃九門徒

- \* 願正坊
- \* 快楽寺(西徳寺)
- \* 西福寺
- \* 真性寺
- \* 善超寺(善徳寺)
- \* 善徳寺
- \* 淨性寺
- \* 応心寺

- 〔別院〕岐阜市門前町四三
- 〔別院〕岐阜市西四ノ三
- 〔別院〕岐阜市長良町一三
- 〔別院〕岐阜市清六町一四
- 〔別院〕岐阜市加納東町一三
- 〔別院〕岐阜市柳郷町一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三
- 〔別院〕岐阜市退転郷一三

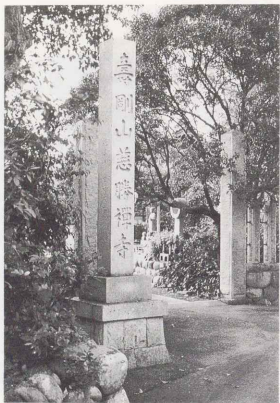
(東は東別院・西は西別院)

(東は東別院・西は西別院)

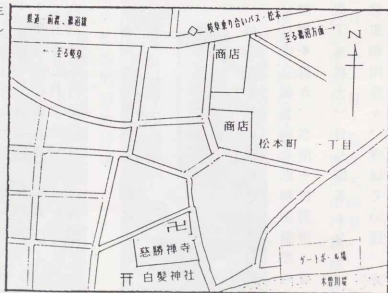
(西は西別院)

住職 宗山派  
開山 本山  
開宗 諸尊  
本に 依

荻谷宣雄尼  
臨濟宗妙心寺派  
獨雲惠覺和尚(元禄八之亥一六九五)年  
森十左衛門(德藏了本居士)  
虛空藏菩薩  
弘法大師  
地蔵尊(水掛け地蔵)



慈勝禪寺



現場見取図

壽剛山慈勝禪寺

■ 各務原市松本町の二〇八  
TEL・0583-827447  
岐阜乗合バス(松本下車)南へ徒歩五分

縁

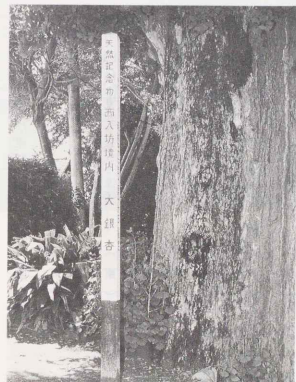
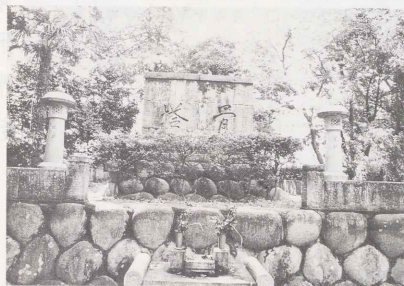
日 (年中行事)

★報恩講(十二月二十日、二十一日)  
★蓮如忌(四月、第四週の金・土日)  
★彼岸会(春季・秋季)

★夏御文(七月)  
★永代経・両度の御命日

歴代和尚の墓碑

(本堂西面)



樹高二十米、幹周四・七米  
運如上人の杖が根付いたと  
承(ある)が銀杏  
の(本堂南面)

歴代和尚

創建 法普寛和尚  
 中興二世 節山慧忠首座禪師 享保十三 庚申「一七二八」年、開基として金剛寺に位牌、四月九日圓寂  
 再中興 妙心前堂壽山光尼座元禪師（再中興）寶曆五乙亥「一七五五」年四月六日圓寂  
 妙心壽海英尼和尚禪師 昭和十年二月二十二日（一八七四）年四月六日圓寂  
 妙心慈航英尼和尚禪師 昭和五年五月二十六日（一八四〇）年四月六日圓寂  
 妙心慈航英尼和尚禪師 昭和六年三月十三日（一九三一）年四月六日圓寂

寺 宇五  
 \*本尊・虚空藏菩薩・

寺は木曾川の氾濫により流されたこともあって、歴代の詳細については

由緒

由緒 由緒 寺は元の名を慈勝庵と呼んでいた。元禄八年（一六九五）に前加納脇本陣の森十左衛門が、佛法を永遠に持続させる目的で心を込めて一寺と、獨惠和向を寄進されて建立された。本陣には虚空藏菩薩を勧解由築地の坪内定賢公より拝領し本堂に安置する。謂開山に拝し、本村に陣屋を置き、当所を位牌所・菩提寺とされる。正徳元（一七一）年、森十左衛門（法名・徳藏了本居士）自ら開基となり、寺号を慈勝庵から慈心勝勝守に改める。節山慧忠和尚等々。寺はその後、寺子屋など積極的に修行して地域文化の発展にも寄与。寺には坪内公殿の過去帳・位牌・寺子屋他寺子屋時代の物と思われる習字の教本など数点が残っている。尚、慶應の頃寺の近くを流れる木曾川の氾濫によって寺は流失し、資料などが失う物も多く過去の詳細を知ることは難い。明治七年（一八七四）再中興、壽山光尼にて本堂・庫裏を新築維持する。爾来、年は移

り昭和五年（一九三〇）より寺は経営に弱す。しかして戦後に至るや農地解放によつて因窮しい時代も経験するが、苦難を乗り越え寺を現在に守る（平成九年八月八日木曾町立法堂落成式）註：寺からの資料の中に慶應六年とあるが、慶應四年九月八日に明治と改元されている。慶應六年は無い。

縁日

※ 毎月十三日。  
 ※ 八月二十四日夕、水掛け地藏菩薩祭り。  
 ※ 四月二十一日、弘法大師会。  
 ※ 九月二十四日、秋彼岸山門施餓鬼。

歴代住職の墓碑

\* 中興二世・節山慧忠首座禪師



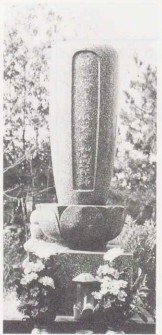
\* 妙心壽海英尼和尚禪師



\* 再中興・前堂壽山光尼座元禪師



\* 妙心慈航英尼和尚禪師



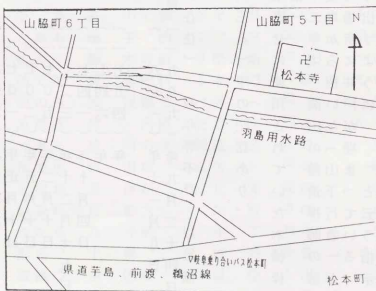


住宗開本  
職山派  
佛諸

臨（無）  
道濟宗  
威比直妙  
法親野全  
大野治心  
師（音）  
（製）  
者衛左  
門（少  
・製）  
年切寺  
・製下  
作切二  
年村世  
不製）  
詳作）



松本寺本堂



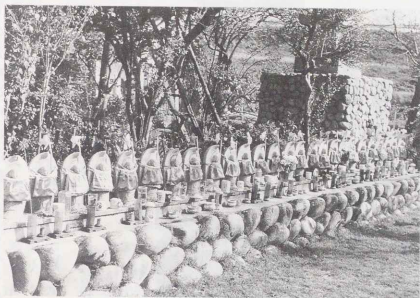
現場見取図

延宝二年  
寅十二月  
没

不動山松本寺

(しょうほんじ)

■ 各  
岐務美  
五原市  
八・三・連合山  
（八三）  
（八三）  
三九一  
七七五  
小佐々木  
各  
務美  
原市  
連合  
山脇  
町新  
野四  
国第  
二二  
六六  
八八  
番番  
札札  
所所



水掛地藏尊



れる。寺には秘めた歴史を物語る物がある。



(寺宝の一軸の墨書)  
 一天聖九年正月十一日  
 天保九年正月十一日  
 繪彩色保并表護西入代寄付  
 濃州山脇邑奈本(松本)  
 禅寺什物也  
 天保九年は、一八三八年。



(達磨の軸一幅)  
 尾張国丹羽郡西成村  
 山友赤見丹羽郡西成村  
 山口宗昭(治)? の  
 付け書あり。

縁  
 ★観音会(毎月十八日)

歴代和尚の墓碑



開基の碑。



歴代和尚尼の墓碑



(領主坪内貝塚氏位牌)  
 寶永五戊子年四月十一日  
 (一七〇八)



(開基夫妻の位牌)  
 延寶三甲寅十二月・没  
 (一六七四)







# 松岳山常貞寺



住宗開本  
職派山基  
に尊基山派職  
諸佛  
に尊基山派職

真武  
宗山秀道  
谷派  
真宗秀道  
大谷派  
貞玄法師  
・享保元  
・貞玄法師  
・享保元  
來  
・聖德太子  
・製作年  
・製作者不詳



現場見取図

■ 各務原市前渡西町一〇七九  
T 岐南へ徒歩七分  
E 岐南へ徒歩三分  
L 岐南へ徒歩一分  
バス前渡西町下車  
五八三(八六)九二三八

十	十	十	十	九	八	七	六	五	四	三	二	開
四	三	二	一	世	世	世	世	世	世	世	世	世
坪内氏八代目 守寺	武院山秀道	常智院秀道	智鏡院秀道	積善院秀道	積善院秀道	積善院秀道	積善院秀道	積善院秀道	積善院秀道	積善院秀道	積善院秀道	積善院秀道
現住職	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳	雄見淳
作	作	作	作	作	作	作	作	作	作	作	作	作
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日



(1772)

(1773)

（小）  
常貞寺重物  
寛政四年  
令當寺江納者也  
坪内氏藤原定効・自作

（大）  
常貞寺江令納者也  
坪内氏藤原定効  
作之者也

經箱の裏面に彫られていた文字  
千時寛政五年  
常貞寺江令納者也



由 純柏

寛文三癸卯（一六六三）年逝去の、前叡六百石の領主坪内家三代目、坪内嘉兵衛定勝公の墓所に上には常貞寺堂宇を建立せしと云う。坪内家八代目定効公の明記した坪内家寺社記録によれば、堂宇が建立されたのは、延宝五丁巳（一六七七）年の二月十五日と伝えられている。常貞寺の山号寺号は、この坪内家三代目定勝公の戒名が、宗直探院殿松岳常貞居士であるから、松岳山常貞寺と命名されたと聞く。先代の真宗大谷派の寺紋は丸に州浜、常貞寺のこの地方では好評を残す。秀雄法師の名弁の法話は、戦前のこの地方では好評を残す。秀道氏。

縁

★永代講（四月七日前後）  
★報恩講（十一月二日、三日）

歴代住職の墓碑

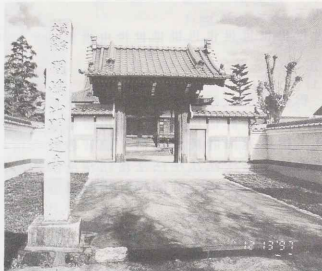


日本堂の鬼瓦  
昭和五十九年に、本堂屋根の瓦（寺内に保存）

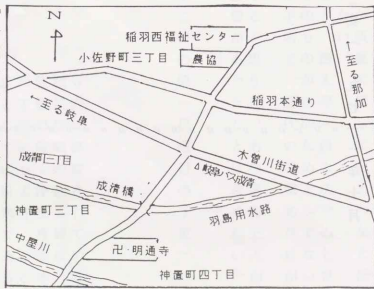
間嶋山明通寺

（まじまきさん、）

■ 各務原市神置町四ノ五九番地  
南岐阜原市合バス成清下車  
T E L ・ 0 5 8 3 ( 八 二 ) 0 2 5 5  
南へ徒歩十分



明通寺本堂



現場見取図

住職 宗派 開山 本並  
職派 山基 尊に  
諸佛

小島榮春大谷派  
浄土真宗大願主・文明九丁酉（一四七七年）  
河野了善坊（願主）  
河弥如来・聖徳太子・製作年不詳）  
親覺聖人・製作年不詳）

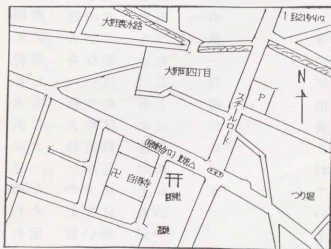


道遙山自得寺

■各務原市大野町四丁目一〇番地  
T 岐阜 南乗合バス東大野下車  
E L へ徒歩三分三八三（八二）七四六七



自得寺



現場見取図

宗住  
開山  
本派  
並に職

田中恵峰尼（十二世）  
臨濟宗妙心寺派  
臨丹權心寺體道宜全大和尚  
弘親世音薩士（製作者・製作年不詳）  
阿弥陀如来・達磨大師。（いずれも製作者等不詳）

歴代和尚

二四三五六七八九十

一 體道宜全禪師  
二 雪東座  
三 嚴東座  
四 滿座  
五 智主座  
六 東主座  
七 誦禪座  
八 相玄座  
九 外律座  
十 翁主座  
十一 戒主座  
十二 正應宗座  
十三 續應宗座  
十四 妙應宗座  
十五 心西住田中恵峰尼

延寶四年辰  
貞享六年巳  
正徳三年寅  
寛政三年申  
明和四年酉  
弘化二年子  
寛政五年子  
弘化四年子  
明和三年子  
安永三年子  
寛政五年子  
弘化三年子  
昭和二年酉

（一）一六八七年  
（二）一七〇七年  
（三）一七二三年  
（四）一七四一年  
（五）一七五九年  
（六）一七七七年  
（七）一七九五年  
（八）一八一三年  
（九）一八三一年  
（十）一八四九年  
（十一）一八六七年  
（十二）一八八五年  
（十三）一九〇三年  
（十四）一九二一年  
（十五）一九三九年

寂寂寂寂寂寂寂寂

★寺

宝

当由道遙山と号し、創立は寛永二壬丑（一六二五）年と伝う。当時、更木村の住  
て一字を建立し、申す者が開基となり、新加納村の少林寺二世・體道大和尚を開山とし  
入るが、その後、台風に罹り、現在に至る。明治四十一年、本堂及び庫裏を再  
建するに際し、其の儀に当り、面した観音堂は、大正十二年に再建に漕ぎ着け  
今日に至る。その儀に当り、面した観音堂は、大正十二年に再建に漕ぎ着け  
氏の建立によるもので、毎年三月十八日には観音講を施行している。

★一月一日～五日（修正般若会）  
★一月一日～三日（修正般若会）  
★五月一日～三日（修正般若会）  
★九月の各十五日（善月祈祷般若会）



住宗開開本  
職派山基尊  
に諸仏

石屋義弘和尚（直定義弘）  
曹洞宗  
仁山傳英和尚  
不分明  
大勢至觀音菩薩  
達磨大師（他に、境内には伏見稲荷・秋葉神社を建立する。



宝 林 寺



現 場 見 取 図

聖 興 山 寶 林 寺

■ 各務原市下切町七四六  
TEL・0五八三（西北）九五六六  
（秋葉神社北）



和 尚 ・ 首 座 の 墓 碑



寺 領 内 の 観 音 堂

★★★ 一月十日（盧濟忌）  
★★★ 三月・九月（彼岸会・各七日間）  
★★★ 四月八日（佛・誕生会）  
★★★ 八月二十四日（開山忌）  
★★★ 七月十五日（盂蘭盆会）  
★★★ 十二月十二日（大本山開山忌）

歴 代 和 尚 の 墓 碑

歴代和尚

初	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世
世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世
世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世

(中興)

(法地開山)

現住職

仁山傳英和  
佛乘大和  
仙樂大和  
大圓祥大和  
大別龍大和  
大秀道大和  
祖山秀大和  
靈翁祖大和  
家岳苗大和  
益全大和  
玉山臨大和  
天峰大和  
大泰大和  
大俊大和  
龍道大和  
透峰大和  
山外大和  
貞順大和  
石屋義弘和



……… 歿年等、他不詳につき不記。

寺

開創年については、詳細は不明である。寺の言い伝えでは、元禄年間(一六八八年九月二十三日辰年)一七〇四年三月十五日甲申年)に、久運八世の傳英和尚を請じて開山と伝える。

和尚寺誌には、明和七庚寅(一七七〇)年の譜に、秋葉神社を請神・当寺三世の仙峰大和尚の代とある。

文化九壬申(一八一二)年三月二十四日「本陣では四月二十九日に当る。」に同神社の鳥居を普請と

寺誌は記録する。

文政十三庚寅(一八三〇)年には、九世の家山良翠和尚が発起した神社の再建を、十世の益全謙受和尚の時に上棟したとある。秋葉神社は、この時点において焼失か、流失をしていたものと思われる。

慶応元之丑閏年(一八六五)五月十七日「本陣では六月十日」木曾川堤防決壊により、田畑および境内地も水流により浸失の記録あり。

慶応二丙寅(一八六六)年、智燈和尚(桃春五世と思われる……)「桃春院五世は、彦州玉塚で二七九二年に歿す。神誌に記録あり。従って他寺か……」が本堂を再建とある。

明治三年(一八七〇)九月十八日「本陣では十月十五日」台風強雨にて、本堂倒壊。この台風で下切村住家の多く倒壊。

明治四年(一八七一)八月十日「本陣では九月十四日」隣寺の桃春院十九世住職の、野々山影山和尚が本堂を再建。なお、寶林寺の十六世として、徹山樹英和尚を住職とせしむる。

明治五年(一八七二)十二月三日をもって、太陽暦の一月元旦(一八七三)「編年、記」

明治八年九月八日、宝林寺十六世樹英和尚、桃春院住職へ。

明治十一年(一八七八)十一月、平地格転落。(尼寺)

明治十二年(一八七九)二月十日まで、春光貞順尼和尚が住職。

明治三十三年(一八八〇)二月、大正七年(一九一八)二月二十九日、庵山樹英和尚が住職。

大正七年(一九一八)二月二十九日、庵山樹英和尚が住職。

昭和五十七年(一九四二)七月二十九日、法地に戻して尼住職退席。現、直定義弘和尚が住職に就く。

日

三月十一日 第二日曜日

十一月一日 曜日

午後二時より大般若会。

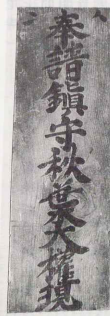
八月六日、施食会。

歴代和尙の墓碑



文政十三年二八〇 鎮守再建上梁札  
 (奉譜鎮守秋葉大権現)

裏面 當山鎮守外務郡上切村御堂主  
 明和十三年八月十日吉拜日 徳村氏子中

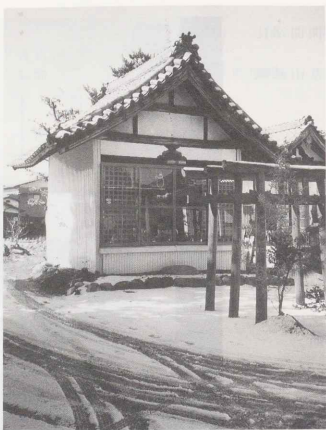


(當山鎮守再建)

裏面 白山大権現 文政十三年  
 秋葉大権現 上梁總村安成所  
 鎮守大明神 庚寅八月二十八日 白  
 裏面 當山鎮守再建 敬住持益全



寶林寺 稲荷堂



(奉譜鳥居)

正二位尊可稱伊弉諾大神  
 現五世義山別名  
 正一位秋葉三尺八権現

裏面 粉化九年壬申 天 三月二十四日  
 於年 男四十一歳 關 源 也



(奉譜上梁萬歳)

裏面 文政十三年 各寄附者村 各名也  
 奉譜鎮守秋葉大権現 上梁總村安成所 謹  
 文政十三年 八月十日吉拜日 徳村氏子中





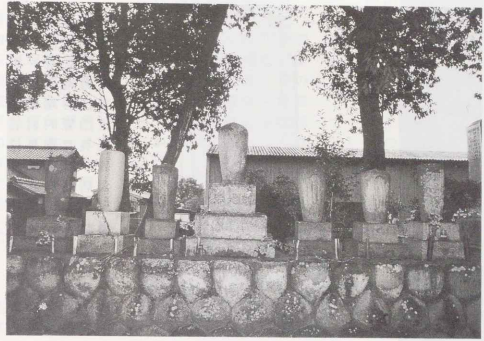


師神祖仁守遠山傳中人並雄賀陽乎丁丑家丁六見弘清神師入極法門  
 後繼廓如法為妙處禪師曼之晚年名開丁朝朝是往花園又發狂化門  
 守得庚戌師之徒僧寺拓尼正者一人物志創金龍寺于濃州縣栗野大佐  
 野也今師開山蓋師自歸居申興之佐勸請弘濟禪師以為第一祖甲寅秋七  
 月十一日師取滅於豫陽安光寺春秋八十四立碑配位於開山末奈紀安

前住妙心堂寺創建教將賜真性淨明禪師遠山仁大初尚

その裏面の甲寅は、開山後の寛政六甲寅で  
 ている。四年に該当する。尚、位牌に彫られ  
 ている秋七月十一日は、現太陽曆では八月  
 の六日に当る。従つて、開山後五十数年の  
 後に書かれたものと思われ。

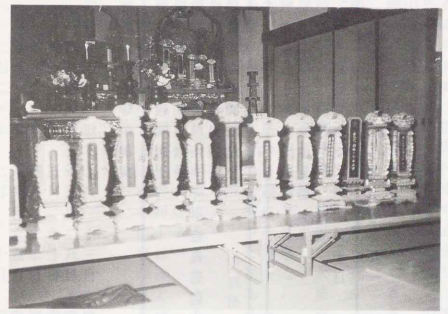
開山 淨明禪師該歴位牌の正面



歴代和尚禪師の墓碑



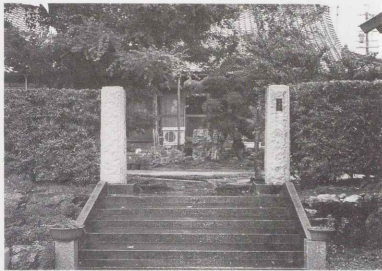
法弘三十三の道に参



歴代領主の位牌



河北山桃林寺



桃林寺

宗住本開  
山派派  
派基基  
諸公

蟹江慈千尼  
臨濟宗妙心寺派  
友室和尚大神師  
片山越後守成久  
聖觀世音菩薩  
達磨大師・弘法大師

(天文七年創建)「一五三八年」



現場見取図

■各務原市前渡東町八〇三七八  
T E L ・ 〇五八三(八六)九二五〇  
愛岐大橋(関江南線)北詰め交差点東(車で三分)

歴代住職

創建初代 友室和尚大神師  
この間の空白年は不詳  
中興 惠海禅師(文化四年)  
以下 現在地に移転による  
初代 泰庵慈春尼和尚  
二代 惠龍慈保尼和尚 (前住職)  
三代 松鶴慈千尼和尚 (現住職)  
四代 菩提宗孝和尚 (現副住職)

示寂年不詳

昭和六年三月十二日

示寂

当寺は天文七(足利義晴の時代)年、片山越後守成久を開基にして、友室大和尚を開山師として創立したとの言い伝えあり。元々は木曾川の中州に位置していた土地のため、寛永年間における洪水のために寺院流美濃史によると、寛永年間中における木曾川の洪水被害の主なものは三度記録されている。最初に出てくるのは、寛永三年(一六二六)五月、この時は前度村で破堤とあり詳細は記録されていない。二度目にある記録は、寛永七年(一六四一)十二月、木曾川筋の洪水で坪内領内堤が大破と記す、そして三度目も同じく寛永十八年(一六四一)十二月に、前度地内に大きな破堤を記録している。同じく桃林寺が流失したのも、このいずれかの山脇地内の松本寺が流失したのもこのいずれかの洪水である。同じく桃林寺が流失したのも、このいずれかの洪水時だつたと考えて間違いはなからう。洪水や火災は、これまでに寺に残された古記録を全て消滅させてしまう。桃林寺に寺院古記録が無いのもこうしたことに起因しているものと考えたい。

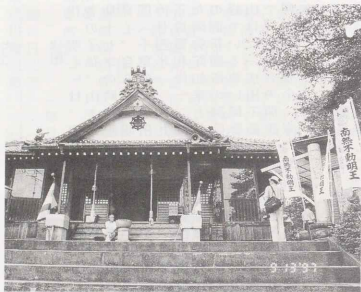
洪水による水害の被害は、当時としては頻繁に起きていたと考えられる。現在のように土木技術が発達した時代と違い、武士社会の権力だけでは何の対応も出来なかつたものと思われるが、水害を恐れて、昭和三年に桃林寺は、恵海和尚の時代に中興となり、文化四(一八〇七)年再建成るが、水害を恐れて、昭和三年に至って現在の地に移転している。

高橋武平司を父として安八郡に生まれた糞虫山人(本名、土岐源吾)の描いた襖絵が数点残されている。糞虫山人は放浪の画家で、明治初年頃当寺に奇遇し、この間に付近の農家なども含めて多くの絵を残している。糞虫山人は由来は、山人本人が絵画に必要な物一切を、背負って歩く糞虫に似ていることから付けられたという。一節によると、本人自身が「糞虫」と称したとも云われている。彼は十四才のとき思うことあつて放浪の旅に出ている。その後長崎では、日高鉄翁に南画・文人画の手は

住職 宗開  
派職 山基  
本尊 不動明王

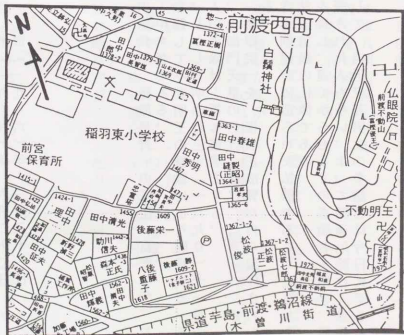
富樫優王  
真言宗醍醐派  
法印律師明心和尚（矢熊山に不動明王を勧請）  
成田山不動明王（製作者、製作年不詳）  
豊大閣祈願院本尊阿弥陀如来（權僧正成賢、製作年不詳）

毘沙門天（製作年不詳）  
弘坊大師（製作年不詳）



矢熊山佛眼院

矢熊山佛眼院（前渡不動尊）



取見場現

■ 各務原市前渡西町一九七五番地  
岐阜乗り合いバス前渡不動前下車すぐ  
T H L・O 五八三（八六）九二三二



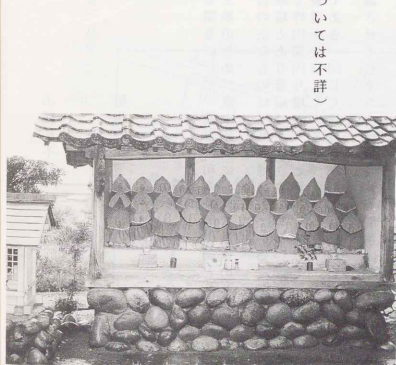
泰庵慈春尼和尚禪師の碑

ときを受けている。糞虫山人は自由を好み、旅先では乞われるままに描き、揮毫には、寒山拾得・達磨・日  
の松・七福人・大黒之図などの水墨画なども数多く残している。彩色の絵の具は、チサの実、桑の実、日  
菜の花、玉葱の皮など植物顔料から採取したものを使用したために、色彩の退色は少ないという。  
糞虫山人は貧に甘んじて富貴を望まず、自由にあきたる庶民の中の画家と言われている。この各務原の前度  
の地に、放浪の画家の足跡が残されていることはあまり知られてはいない。  
奇遇先の名古屋の長母寺で、六十五年の一生を終  
えている。墓地はその長母寺にある。

住職の墓 墓は、その長母寺にある。

※ 糞虫山人の残した襷絵数点他  
（年次行事）  
※一月一日 午前零時より正月元旦祈願会。  
※三月 十月 各一回当山祠堂会。  
※四月 十月 休日を選び、花まつり会。  
※七月廿五日 施餓鬼会（龍泉寺）

仕職の墓 墓碑（現在地に転居以前の住職については不詳）



寺院内に祀る三十三観音

歴代住職

初代	明心和尚	明治三十一年	七月二十五日	遷化
二代	法印律師都正和尚	昭和四十五年	六月二十七日	"
三代	法印中僧正心行和尚	昭和四十九年	七月二日	"
四代	後明心行和尚	昭和五十年	六月二十二日	"
五代	現住職 優王和尚	昭和六十一年	三月三十一日	"

寺主 守玉

由緒

当山の初代「明心」は、旗本で当地の第十一代の領主「坪内嘉兵衛・藤原昌壽」の家臣、富樫(が)左衛門と称する者の子孫、山本八郎藤原の盛行の一子で秀之助と申す者である。その報恩のため発心、自らを「明心」と改名、当山に参籠して不動明王の靈験により開眼する。その下總の国(千葉県)成田山の御分所として諸人の厄除けを祈る靈場とする。一年に「權正成賢和尚」ご創建による豊田吉秀公の御祈願所「佛眼院」を、權正成賢が自ら製作された御年の歳月を経ては、阿弥陀如来と成賢大僧正が醍醐寺を創建時に造られた仏像であり、七百九十餘年従って当山は不動阿彌陀如来像として真言宗醍醐派を称し、遠くからも多くの参詣者を招き、靈験もあらたかたて、盲目者の開眼された人も多数あり、諸病の平癒された人も多く、よって開運厄除け、無病長寿、良縁幸福、家内安全、家門繁栄、交通安全等の守護佛として、遠近老若男女の参詣者は今日に至るも絶えることは無い。

明心の実父の山本軍八郎昌盛は、明治維新の際(永井文書によると慶応式年十月)、坪内嘉兵衛(藤原昌壽)に従い岩倉公東征に供奉していた。註。當時の軍中日記、永井文書では鳥羽伏見の戦が終止を告げる前渡の領主、坪内嘉兵衛や加納藩の永井弘衛に続いて「山本軍八郎」の名もふんだんに出てくる。なおこの

時、三井の領主、坪内梧太郎も東征に名を連ねている。……(編纂書記)  
然し役も終わった後、王政復古の激寄せは武士が権勢を利かす時代では無くなっていた。帰農した軍八郎は人生について悟るところもあり、息子明心の明心が矢熊山に不動明王を勧請したことを機に、自らも仏門に帰依して元の姓の富樫を名乗り「宥心」と名も改め、明治三十六年十一月二日、当山に於て六二才で寂す。当山上には、第十一代富樫昌壽が、家臣の宥心の為に建てた「法師宥心の墓」碑を残している。

富樫宥心は前渡村旧領主坪内嘉兵衛藤原昌壽の臣にて軍八郎昌盛と云う  
維新の際昌壽に従い岩倉公東征に供奉し役止みて帰農し憂い悲し  
明心矢熊山に不動明王勧請せしより専ら佛門に帰依して宥心と称す  
明治三十六年十一月二日 当山に於て死す六三才

「世を捨てて 坪内昌壽に 帝花を友」……註。世を捨てては、釋教に歸依するを、帝花は、花の王を指す。……  
十一代 坪内昌壽

- (最後に記された句は辞世だろうか、それとも昌壽が供養で書いた句か……?)  
この矢熊山は風光絶佳の地で、四季を通じての眺めも良い、とくに春には桜の眺めも良く、遠足などで訪れる学校や一般客が多い。
- 日(年中行事)  
※紫燈大護摩供養法要修行 (一月一日)  
※人形供養 (三月三日)  
※盆施餓鬼法要 (七月十日)  
※弘法大師命日法要 (毎月廿一日)  
※水子代供養法要 (毎月廿四日)
- 日(年中行事)  
※節分会 (二月三日)  
※当山大祭 (四月第四日曜日)  
※冬至星祭り供養修行 (十二月廿二日)  
※不動尊命日法要 (毎月廿八日)

その他

☆本堂脇「仁王像由来」  
当山三世の了英和尚のお庫裏さんには芥見(現岐阜市)の出身である。この人の実弟に「古田光連」とい  
う人が居た。この光連氏は子供頃から佛画を描き、暇があると独りで仏像を彫っていた。佛画のほうは、  
小学校の低学年の頃から腕は抜群であったが、全て独学で身につけた技であった。そして卒業するや名古屋  
その低学年の時に描いた水墨による佛画の出来ばえに、校長は驚嘆したと云う。





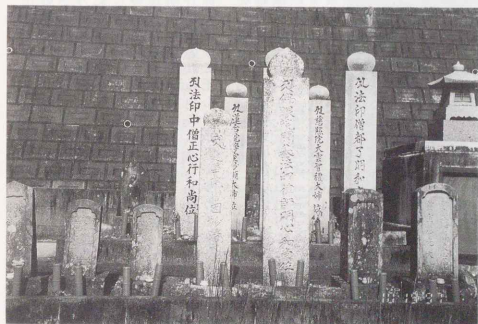


※ 承久の変における戦死者の供養墓  
 ……かつて此の辺り一帯に散在していたものを移した



山上に供養される初代明心の碑

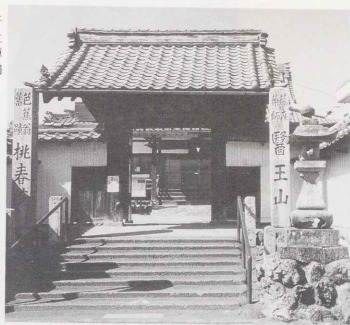
歴代住職の碑



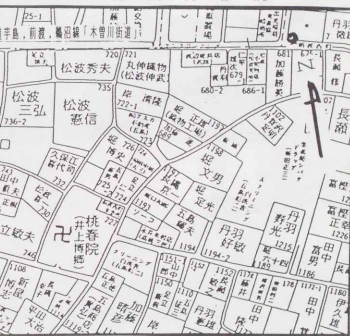
歴代住職の碑

医王山桃春院

各務原市前渡西町三ノ二七二番地
岐阜県東り合いバス前渡西町下車西南へ徒歩七分



医王山桃春院



現場見取図

住宗開本
職派創尊
佛諸他

井上博郷
惠心和尚(当时、辻堂として)
桃春院(加納城主の弟戸田甚五郎の息女)
兼師瑞瑠光如来(慈覺大師彫刻、金泊の胎藏)
月光菩薩、日光菩薩、馬頭観世音菩薩、地藏菩薩、大元明王(いずれの塑像、製作不詳)

十二神侍

歷代住職

一	開	基	桃春院殿華驗芳意大姉
二	一	天	大雪大英大和尚
三	二	善	壽堂海仙大和尚
四	三	開	開田大義大和尚
五	四	澄	澄洲秀峰大和尚
六	五	棟	棟山祖梁大和尚
七	六	虛	大雪龍中大和尚
八	七	宗	虚白環中大和尚
九	八	祖	岳俊得大和尚
十	九	祖	山鏡大和尚
十一	十	環	大源中大和尚
十二	十一	靈	中道契大和尚
十三	十二	靈	源俊大和尚
十四	十三	實	大活明大和尚
十五	十四	實	翁翁泉大和尚
十六	十五	魯	翁翁泉大和尚
十七	十六	魯	翁翁泉大和尚
十八	十七	魯	翁翁泉大和尚
十九	十八	魯	翁翁泉大和尚
二十	十九	魯	翁翁泉大和尚
廿一	二十	魯	翁翁泉大和尚
廿二	廿一	魯	翁翁泉大和尚
廿三	廿二	魯	翁翁泉大和尚
廿四	廿三	魯	翁翁泉大和尚
廿五	廿四	魯	翁翁泉大和尚
廿六	廿五	魯	翁翁泉大和尚
廿七	廿六	魯	翁翁泉大和尚
廿八	廿七	魯	翁翁泉大和尚
廿九	廿八	魯	翁翁泉大和尚
三十	廿九	魯	翁翁泉大和尚
卅一	三十	魯	翁翁泉大和尚
卅二	卅一	魯	翁翁泉大和尚
卅三	卅二	魯	翁翁泉大和尚
卅四	卅三	魯	翁翁泉大和尚
卅五	卅四	魯	翁翁泉大和尚
卅六	卅五	魯	翁翁泉大和尚
卅七	卅六	魯	翁翁泉大和尚
卅八	卅七	魯	翁翁泉大和尚
卅九	卅八	魯	翁翁泉大和尚
四十	卅九	魯	翁翁泉大和尚
四十一	四十	魯	翁翁泉大和尚
四十二	四十一	魯	翁翁泉大和尚
四十三	四十二	魯	翁翁泉大和尚
四十四	四十三	魯	翁翁泉大和尚
四十五	四十四	魯	翁翁泉大和尚
四十六	四十五	魯	翁翁泉大和尚
四十七	四十六	魯	翁翁泉大和尚
四十八	四十七	魯	翁翁泉大和尚
四十九	四十八	魯	翁翁泉大和尚
五十	四十九	魯	翁翁泉大和尚

(中興)

昭	昭	昭	昭	明	明	明	天	天	文	文	文	文	文	文	安	正
和	和	和	和	治	治	治	文	文	文	文	文	文	文	文	享	寛
二	二	二	二	三	三	三	化	化	化	化	化	化	化	化	永	保
廿	廿	廿	廿	四	四	四	保	保	保	保	保	保	保	保	徳	徳
六	六	六	六	十	十	十	五	五	五	五	五	五	五	五	三	三
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
二	九	三	八	一	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
七	六	二	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日

示寂



廿九世 玄機慈仁大和尚  
三十世 大活祖雄大和尚

昭和四年に転住のため不詳  
昭和三年戊申(一九六八)年十二月十九日  
昭和五年(一九七六)に入寺。

三一世 大道博御和尚(現住職)

※註、なお当院は世襲制ではない。示寂年の前後は、愛知・静岡へ多くの転住があり先方での示寂。

### 寺守 寺主

※西国三十三番順禮観世音菩薩画(元禄七年戊辰年作)(二六九四)  
※六善神画「奥郭恭法奉納」(明治四十年)(二九〇六)  
※歌舞伎押し絵額「村上深知奉納」(明治廿八年)(二九〇六) 明治時代に筆意は認められてある。左記(専)は有り傳ない。

### 由 緒

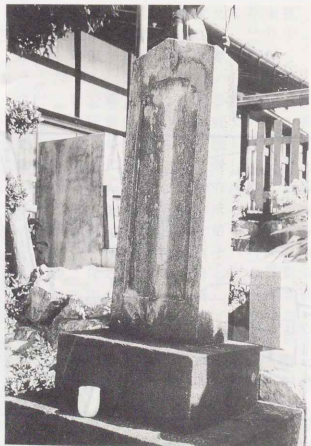
当医王院は、その昔、藤森業師と称する辻堂であつた。永禄七(一五六四)年、十三代の足利義輝が將軍の時代である。この年、恵心和尚が岐阜城主斎藤龍興の重臣で美濃一人衆の一人は、通朝(龍興の家臣であつた)から拝領して辻堂に安置した処、靈験著しく村民に護佛として崇拜していた尊佛「葉師瑠璃光如来」を通朝から拝領して辻堂に安置した処、靈験著しく村民に帰依されたという。ただ岐阜城が信長に攻められたのは永禄十年(一五六七)年の八月であるから、恵心和尚は落城の三年前に龍興の家臣「通朝」から拝領したことになる。この本尊、延暦寺の第三世聖主で、平安期の天台宗山門派祖の圓仁(慈覺大師)の作だと云う。圓仁は八〇八年(大同三年)比叡山上に、最澄についで建康の學園(その後八三三年)六月圓行、常晝と共に、遣唐使「藤原常嗣」に従つて入唐、福建省の開元寺で宗叢に悉曇を学び、全雅に灌頂を受ける。その後五大山の霊場を巡り、都の長安に止住六年のあと、天台、真言の教義と大法を習得し、入唐以來九年後に帰朝している。この圓仁が美濃の地を訪れたのは、嘉祥年間(八四八年)と云われてゐる。もしも本尊の「葉師瑠璃光如来」が当時の物とするなら、九百数十年の年月を経て現在に至つてゐると云うべきだろう。この圓仁の著述には「顕揚大戒論」「金剛異淨地記」はか数多くの著述があり、日本の歴史の上で宗教的にも名を残した天台宗の高僧である。その慶長五(一六〇〇)年は、六十年の十月には、石田三成が斬首されて関が原の戦が終止。この年、時の地頭坪内嘉兵衛が帰依して加藤を大改造、祈願所として、「大文寺」と銘して村内総佛依の寺院となる。

歳が移つて元禄五 壬申(一六九二)年には、駿河の国(静岡県)の全久院十七世「天雪大英和尚」開山と寺歴は記している。この年、信州松本藩主「戸田丹波守康長」の城代家老、野々山氏の正室(加納城主の弟、戸田甚五郎の息女)が出家、桃春院と号して葉師瑠璃光如来を信仰帰依、当寺院の開基となる。尚、最初に戸田(松平)丹波守康長が、播州明石より濃州加納(岐阜)の地へ七万石の城主として所替になつたのは、徳川三代將軍家光の寛永十六(一六三九)年三月三日だ。史実は伝える。当院由緒の戸田丹波守は、この後に赴任したものと思われる。その後享保十四(一七三九)年になり、当院は大文寺を「大文山桃春院」と山号を改め、駿河の国(静岡)の全久院の末寺となつてゐる。そして、約五十年後の安永六、西(一七七七)年になると、山号の大文山を医王山と改め、以後「医王山桃春院」と号し現在に至つてゐる。なお伝えによると、文化十一、甲戌(一八一四)年には、この本尊を盗もうとした盗人が氣絶して動くことが出来ず、捕らえられたという記録がある。そして、明治三十四(一九〇一)年三月廿日、寺院は火災の類焼にあひ、寺伝などは焼失したが、幸い本尊は焼失を免れて無事であつた。現在の寺院は、その後再建されたもので、以來今日に至つてゐる。

.....その他、芭蕉の句碑(天明六年——一七八六年)



本堂前に建つ句碑には、俳聖芭蕉が吉野山から高野山に向かう大和路を歩いていて詠んだ句で「草臥たむれて 宿かる頃や 藤の花」は有名である。句碑は、この辺りは藤の花が多かつたこととあつて、領主の坪内氏が書いたもの。句の調は「あはれ」は、領主の雅号で、天明六(一七八六)年十一月十二日に催主としての坪内菊圃の銘がある。毎年初夏期になると、寺は藤の花も綺麗に咲き、句碑のある寺としても近隣に名が知れてゐる。



開基・桃春院殿華嚴芳意大姉の碑

歴代住職の碑

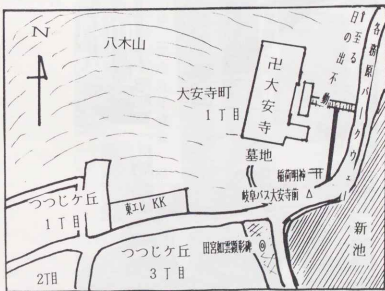
- その他の諸佛
- ☆ 十二神将 (製作年不詳)
  - 一 毘迦羅 (ウツ) 大将 (製作年不詳)
  - 二 招杜羅 (カウツ) 大将 (製作年不詳)
  - 三 真達羅 (マツタ) 大将 (製作年不詳)
  - 四 摩寅羅 (マヒム) 大将 (製作年不詳)
  - 五 波夷羅 (ハヒ) 大将 (製作年不詳)
  - 六 因陀羅 (イナダ) 大将 (製作年不詳)
  - ☆ 聖観世音菩薩 (製作年不詳)
  - ☆ 馬頭観世音菩薩「白馬像」 (製作年不詳)
  - ☆ 菩提達磨大師 (製作年不詳)
  - ☆ 承陽大師 (製作年不詳)
  - ☆ 弘法大師 (製作年不詳)
  - ☆ 誕生佛 (製作年不詳)
  - ☆ 庚申塔「文化元年建立」 (製作年不詳 (一八二二))
  - ☆ 秋葉大権現「安永五年建立」 (藤原朝国定作)
  - ☆ 性器神「文化九年建立」 (製作年不詳 (一八三三))
  - ☆ 三十三観世音菩薩「一番、三十三番」 (製作年不詳)
  - ☆ 地藏菩薩「乾漆像」 (製作年不詳)
  - ☆ 大権修利菩薩 (製作年不詳)
  - ☆ 常濟大師 (製作年不詳)
  - ☆ 竜蛇天 (製作年不詳)
  - ☆ 素戔三尊石仏「文政九年建立」 (製作年不詳 (一八二六))
  - ☆ 火防観世音菩薩「青銅仏」「平成六年建立」 (製作年不詳)
- 縁 日 (年中行事)
- ※ 新春大般若会・兼厄払い大般若会 (二月の第二日曜日)
  - ※ 秋葉神社祭礼 (旧一月廿六日・五月廿六日・旧九月廿六日・)
  - ※ 毎月八日 (旧二月一日) (薬師如来の縁日) (午焼盆)
  - ※ 消防記念祭 (旧二月一日) (火防観世音菩薩・秋葉神社。)
  - ※ 孟蘭盆大施食会 (八月八日)
  - ※ 元祭大般若会 (十一月の第二日曜日)



大安寺

住職 宗山 派  
開宗 山派  
本開宗 山派  
並本開宗 山派  
に 尊山 派  
諸 仏

宏堂承天和尚  
臨濟派妙心寺派  
笑常新和尚  
土岐美濃守頼益(土岐家第六代)  
一 脇通年尼佛文殊菩薩・普賢菩薩(何れも製作者、製作年、不詳)



現場見取図

■ 各務原市鶴沼大安寺町十一番地  
T 岐阜バス05八三(八四)0一五八分  
E 八三(八四)0一五八分

歴代和尚

開山	本寺は開創が應永二年(一三九五)といわれ、当初は天台宗當時寂庵(不詳)と
二代 山	呼ばれて、この間の記録は火災等により資料不足の由、不明な点あり。後、徳林寺と
三代	龍源宗澤和尚
四代	玉翁桂樹和尚
五代	石叟宗根和尚
六代	壁立祖例和尚
七代	萬靈普覺和尚
八代	鷲嶺宗仙和尚
九代	北秀智泉和尚
十代	要堂安津和尚
十一代	戒應玄珠和尚
十二代	完嶺玄密和尚

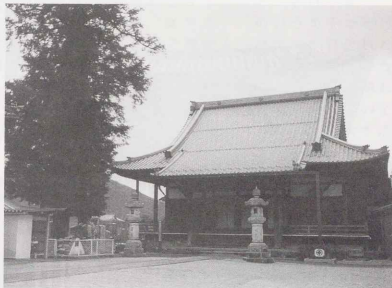






小川山正法寺

■各務原市鶴沼小伊木町二の二十五番地  
TEL・0583(八四)0905  
岐阜乗り合いバスライン大橋下車：北へ徒歩三分



正法寺本堂と雁の太木 天然記念物



現場見取図

住職 宗山派  
開基 本山  
開尊 諸仏  
並びに

佐々木賢昭  
真宗大谷派(東本願寺)  
祐圓和尚  
阿弥陀如来  
釈迦如来ほか  
(製作者・製作年不詳)

歴代住職

二開 祐圓法師  
一了 了圓法師  
二雲 雲悦法師  
三要 要儀法師  
四正 正順法師  
五正 正承法師  
六祥 祥全法師  
七祥 祥全法師  
八祥 祥全法師  
九祥 祥全法師  
十祥 祥全法師  
十一祥 祥全法師  
十二祥 祥全法師  
十三賢 賢珠法師  
十四賢 賢珠法師  
十五賢 賢珠法師

佐々木賢成

(現住職)  
(候補衆徒)

寂年等不詳

由

緒

(慶應 四庚辰「一八六八」年、御維新の際代官所へ出した文面より)

三州(三河)に住居致し候うて、開基裕圓御本尊を守護し奉り、分地と申し伝え候う。然るに今川義元の兵災に罹り候う  
ゆえ、己れの不徳と、慶長元(一五九六、西暦)より四年の間、木津邑並に木曾川北辺へ逃移来たり。即ち宇を建  
地立り候うて、慶長元(一五九六、西暦)より四年の間、木津邑並に木曾川北辺へ逃移来たり。即ち宇を建  
地の墓地場所に住居仕り候らえども、度々出水の為、慶長四年目に今の場所に移転仕り候う故、履歷等更に不  
詳。然れども三州小川邑には、只今にても正法寺屋敷と申して、旧地、歴然として罷り在り候う。





して、伊賀氏から誘われたことを告げ、加担する意思の無いことを誓っている。  
 従って、この寺に集められた供養塔は、京側に付いて死んだ三浦の一族で、東軍の義村では有り得ない。  
 以上、濃尾史より

この承久の変の無縁墓については、激戦の行われた前渡の不動山にも収集墓が供養されている。これらは  
 ごく一部であって、戦には縁のない農民なども多く殺されているが、そうした下層の被害については、全て  
 開から闇に葬られ、史実には明かしてはいない。

(その他)

\*天然記念物の榎。  
 寺院内には、樹齢約四百年と云われる榎の大木が樹高二十二米の姿を見せる。これは天然記念物に  
 も指定されている。カヤの巨木は、県下でも最大級と云われている。

\*葺替えにより保存の本堂の鬼瓦

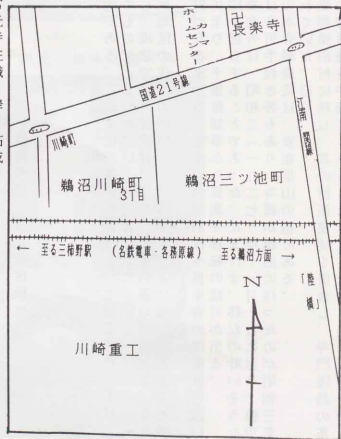
昭和六十一年に建てられた記念瓦の由緒には、  
 「文政十二年(一八二九)より百六十余年(昭和六十一年)の間、風雪に耐えた瓦の一部、鬼瓦を此処に  
 設置して永久保存とする。」当山

昭和六十一年三月建立  
 尚、省略した文中の「坊守」は奥方、「前坊守」は祖母のこと。

### 萬年山長楽寺



長 楽 寺



現 場 見 取 図

■各鉄原市沼沼三ツ池町二の二四  
 国道二一号沿い東へ六百米、関江南線交差点西北角  
 無住：「信徒代表」野入・由良・加藤・桜井・水口氏他。

住職 (無住) 兼務、「長野県伊那市常光寺住職、岸 祐成」  
 宗派 曹洞宗  
 開山 蘇堂「昭和二年」瑞藏寺第十九世・玉山蘇堂大和尚のこと  
 本山 尊基 臥峰存遠(千葉県安房郡館野村・源慶院本寺)  
 及び 釈迦牟尼佛(木造・製作者不詳)  
 諸佛 三十三観音菩薩・三界霊石地藏・薬師如来石仏・馬頭観音。

開山 歴代住職

山 玉山蘇堂大和尚 「北洞山瑞巖寺十九世」……大正十二(多)一九二二年十月 寂年不詳 寂  
 小池宏道(源慶院末寺兼務住職)……  
 富澤隆道(兼務住職)……  
 初代 梅本良秀(二世、大正十五年十二月)……昭和四十二年(一九六七)年十月十六日 寂  
 二 小栗慧藏(三世全超寺住職)兼任  
 代 岸祐成(四世常光寺住職)兼任  
 寺 玉 五 (長野県伊那郡 常光寺住職)

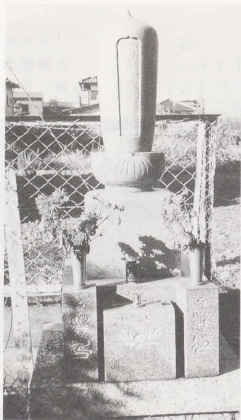
沿革 沿革

長楽寺の本寺は、千葉県安房郡館野村の源慶院である。この地に源慶院の本寺として創立されたのは、文  
 禄二(一五九三)年、口峰存嶽和尚の開基によるものと云われている。口峰存嶽和尚の運命にあつた。しかし  
 その歴史を持つ長楽寺も、天災によつて倒壊し、現地では再建困難を呈し、廃寺の運命にあつた。しかし  
 幸運にも寺院建立を切望していた鶴沼の三ツ池地区の住民の願いとも一致することになり、長楽寺を救う  
 結果にもつながつたのである。  
 大正十二(一九二二)年十二月、千葉県の館野村安布里から、岐阜県の鶴沼村へ長楽寺の移転許可願いを  
 提出。大正十三(一九二四)年十二月二十六日に至り、千葉県知事から長楽寺移転の認可が出る。  
 信徒の願ひは、この地に心安らぎを得る寺院を建立することであつた。たまたま、移転の叶い。そうな寺  
 が前記に存在することを知り、移転となつた。長楽寺は、昭和二(一九二七)年十一月一日に至り、鶴沼村  
 三ツ池の地に移転建立の完成をみた。(法的には許可手続き等もあり、寺籍が鶴沼に移つたのが昭和三年)  
 この長楽寺の旧跡は、先に記す千葉県で、その本寺源慶院は、安布里山の裾にある。  
 現地の源慶院に長楽寺に関する付記が刻まれていた。曰く、其の財産檀徒を併合し、寺門隆昌の基礎  
 「一、昭和三年末寺長楽寺の寺籍を、岐阜県稲葉郡鶴沼村に移し、其の財産檀徒を併合し、寺門隆昌の基礎  
 に移す。よつて之を付記す。昭和十二年四月吉日兼住中興大震災で本寺源慶院と、末寺の長楽寺が壊  
 滅した大きな理由は、大正十二(一九二二)年九月一日、関東大震災で本寺源慶院と、末寺の長楽寺が壊  
 再建を図つたものである。いわば末寺を切り捨て、捨てることによつて、本寺を生かせたと云つていいだろう。  
 この源慶院は古い歴史を持った寺である。現地の長楽寺跡を見守る小山の上には、元祖の天真禅師の亀墓  
 が建立されている。その基盤の銘文には、禅師の骨を三ツに分け、一つを延命寺に、一つを光厳寺に、他の

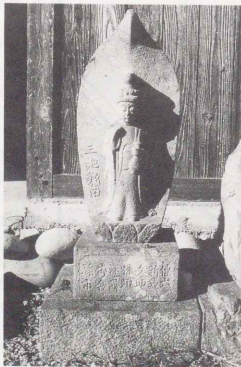
一つを長楽寺に収めた」と記す。尚、長楽寺の本寺は、千葉県安房郡館野村源慶院から、岐阜県稲葉郡那加  
 村の瑞巖寺に本寺が変更される。その後、臨時の兼務住職を手続きに置いて置いたが、大正十五(一九二六)年  
 十二月廿四日、梅本良秀住職を初代に据える。しかし没後、無住となり、兼務に長野県伊那市大字手良区野  
 口の常光寺住職、岸祐成を据えて現在に至る。

住職の墓石碑

緑 日  
 \*毎年八月、盆大施餓鬼会。



初代 梅本住職の碑



薬師如来石仏







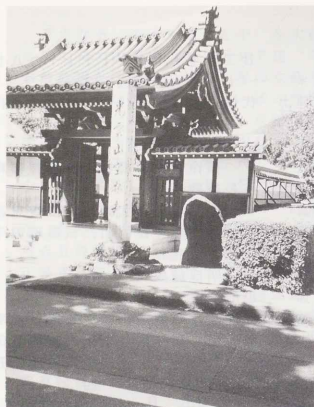




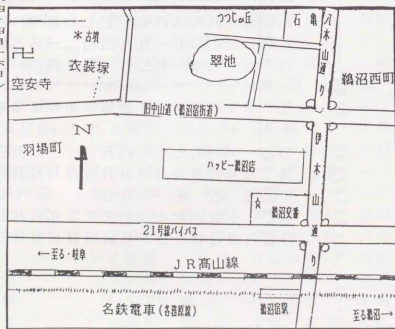
往住宗開本並  
職派山基尊  
諸佛

長岡宗門  
親鸞聖人  
阿彌陀如來

（創立、文明十六甲辰年一四八四一四月六日）  
（空安寺の公称は文明十七己巳年一四八五一四月十五日）  
製作者・製作年不詳）



空安寺



現場見取図

光雲山空安寺

■ 各務原市  
T 名鉄電車  
L 各務原市  
O 各務原市  
五原沼  
八三線  
場町二  
（八四）  
〇 宿二  
下四三  
六北西  
五へ  
徒歩八  
分



川上貞奴



川上貞奴の墓



## 年 中 行 事

\* 修正会 (一月一日)  
\* 永代経 (一月一日) 秋、九月一日)  
\* 宇蘭盆会 (七月十五日)

## 歴代住職 碑

(住士眞砂は他の宗派と通じ共同墓)

\* 彼岸会 (三月十七日から満期、秋、九月廿日から満期)  
\* 報恩講 (十月二十一日)  
\* 歳末勤行 (十二月三十一日)

## 史 跡 「衣装塚古墳」



## あ と が き

各務原市歴史サークルは市内の寺院や史跡の歴史探求を目的に発足され、毎月一回市内各地を回って歴史の見聞を広める活動を行っておられます。こうした活動の中で、今回は市内寺院の南部地区と鶴沼地区を調査され、結果をとりまとめられました。大変貴重な資料として記録してゆくことが現代に生きる我々の責務であると感じ、歴史民俗資料館において刊行することに成りました。

市内各地の寺院を巡る調査には大変なご苦労があり、多くの時間が費やされており、貴重なお話やエピソードなどの体験をお聞きし、歴史サークルで編集された資料をそのまま印刷することが現実的であると判断し、原文のまま刊行いたしました。

今後とも、各務原市歴史サークルが地域の歴史を掘り起こし、後世に残す資料の集積に努められ、活発な活動をされますことを願ってやみません。

各務原市歴史民俗資料館

館長 小川和正



かかみがはらし じいん  
各務原市の寺院 (その二)

平成十年二月十日

編集 各務原市歴史サークル  
発行 各務原市歴史民俗資料館



各務原市図書館



114884679



各務原市図書館



11484679



5  
0